

中越地震被災地から救出した日記にみえる

関東大震災の記事

矢田 俊文

はじめに

二〇〇五年七月二十日、新潟大学人文学部教授船城俊太郎氏を通じて、同大学法学部元教授佐藤明夫氏と連絡をとり、二十九日、二〇〇四年十月二十三日の中越地震被災地である小千谷市山谷のお宅に伺い、新潟大学人文学部地域文化連携センターに、近世末から近代にかけての書籍・文書の寄贈を受けた。同日、佐藤先生の仲介で、御親類の佐藤英一氏からも近世末から近代にかけての書籍等の寄贈・寄託を受けた。寄託資料は大正十年（一九二一）と十二年（一九二三）の佐藤軍二氏の日記で、そのほかの資料は寄贈いただいた。

寄贈・寄託をうけた資料は九月十三、十四日の両日、新潟大学人文学部助教授原直史氏（近世史）を中心に、筆者や院生・学生数名で整理作業を行ない、仮目録を作成した。寄贈を受けた佐藤明夫家の文書は三八二点、寄贈・寄託をうけた佐藤英一家の資料は九七点であった。佐藤明夫家の資料には明治の村役場文書等、貴重な文書があるが、ここでは、寄託をうけた大正十年と十二年の佐藤軍二氏の日記の一部、関東大震災について書かれた箇所を紹介する。

佐藤軍二氏の日記は、大正十年と十二年のものであり、大正十一年の日記はない。日記は二冊とも、博文館刊行の市販の日記帳に記されている。

大正十年のものは、一月から三月までが片貝校在学時の日記で、四月以降は新潟県高田師範学校（以下、高田師範と略す）在学時の日記である。大正十年の日記は一五才、大正十二年の日記は七才（高田師範在学中）のときに書かれたものである。佐藤軍二氏が高田師範に合格したことは、高田新聞、高田日報に報道されている。日記には、受験や合格の様子も記されている。

日記の内容は、勉学のことを中心であるが、大正十二年九月に起こった関東大震災のことについても記されているので、今回はその箇所のみ紹介する。

一 佐藤軍二日記の関東大震災記事

凡例

- 一 原則的に常用漢字を用い、読点・並列点を付した。誤字・脱字は傍に正しい文字を記すか、（ママ）で示した。
- 二 変体仮名はひらがなにした。
- 三 文字に塗抹がある場合、もとの文字が読めるものは左傍にゝを付し、右傍に書き直した文字を記した。
- 四 文字が判読しがたい場合は□とした。

1 大正十二年九月一日

九月一日 雨

八時から始業式が開催された。校長先生の新学期に対する感想に次いで、小原先生の告別式をあぐ。先生は魚沼親

陸会の一員として付属の主席訓導として務めたりしが、今回岩船郡視学に榮転することになったのである。次いで浅田總太郎先生の新任式をあぐ。午後は大した事なくして過す。夜はお堀河津に於いて煙火大会を行ふに際して、生徒一同に対して外出を許可す。果してあるかないのか。

正午大地震あり。近年稀なるものであつた。それが大惨害をかもすとは神ならめ身にいかで知るべき。

2 大正十二年九月三日

九月三日 雨

東京では未曾有の天災で実に想像以外であると。それにしても東京の兄きや、横浜の叔父さんは何うなつたものであるやら実に心配だ。

3 大正十二年九月四日

九月四日 雨

帝都の全滅で東京の新聞は何も来ない。朝気分が悪いので床についた。寄ればすぐ都の話しだ。第四限は講堂修身で帝都の惨害を語り、次いで校風の改良をいたすべく対面を汚さ^(ママ)ぐるやうになして、決つして落書なるものをしてない事などの訓令があつた。

放課後我等四人の予算選仕合をやつたが、自分は気分勝れず如何としても仕合する気になれずして両方とも敗れた。

4 大正十二年九月九日

九月九日 晴

午前中は大した事なし

午後は外出して停車場に行つて見た。避なん民を待ち受くる人でいっぱいである。その中に極度に被労した非なん民が無事なる者は稀で、ことごとく面やつれて、一見してひなん民なることが分つた。中には、白く繻帯にまかれた人などもあつた。そして家人又は知己にあつたその時の嬉し顔は到底想像することは出来なかつた。学生と思□しくて、書物をかっいで行く人もあつた。

5 大正十二年九月十一日

九月十一日 晴

課業には大して変つたものはなかつた。

夜は大漁座に開かれた東京震災救護の目的のため開かれた新ぶん記者などの実視談をき、に行つたが、開会の辞につれて遭難した日本大学生の山口とかいふ人の遭難話があつた。それについて安藤司書の詳細に互つた実視談があつて、あの繁華であつた東京の状の現在の破壊されたとに比してかたつた。

このころ時間も大分たち、話も大方同じいやうであつたからして皆んなかへつてきた。

6 大正十二年九月十二日

九月十二日

前夜東京の惨状をきいて実に不安の念にかられてねむつた。そして夢に父が東京から来て無事なる事を知らしめられた。果してけさ一通の端書を受けとつた。それには一日無事とかいてある。実に不思議のものと思つた。

7 大正十二年九月十三日

九月十三日 晴

課業には大して変つたものはなかつた。午後の課業時間をはやめて、大漁座に活動を見に行つた。主として見るものは東京震災の実景を写すものであつた。而して時節未だ早いので、単片的の写真をのせたに過ぎなかつた。而してその悲惨なる状態が伺れた。其の外、悲劇喜劇などあつて、あまり見るべきものではない。五時には終つた。

8 大正十二年十一月十四日

十一月十四日 晴

久し方の好い天気であつたが風がばかに寒かつた。

第一限は詔書奉読式があげられ、その後で校長先生の御趣旨に就いての講話があつた。第二限は帝国図書館長松本某の講話あり、かの大震災当時に教育の偉大なる力のあつた事を論じ、帝都を復興するには何よりも精神の奮起といふ事に就いて力説、色々の有益なる例などを引いて一時間に互る講話をなして、多大の感動をあたへた。

9 大正十二年当用日記補遺

東京の死傷者と焼失全戸数 九、二十三

死者七六一四人

焼死者五六七七四人

溺死者一一二二三人

圧死者三六〇八人

負傷者二一六七人

死傷全数十万三二八六八人

焼失戸屋三〇一三三六戸

一般家屋二九三五二七、神社仏閣六四四、官私立学校七二六、病院九三、半焼二一〇

以上が佐藤軍二日記に書かれた関東大震災にかかわる記述のすべてである。その日に書かれていることは大震災以外の記述もすべて翻刻している。日記には今回翻刻した日以外にも記載があるが、大震災についての記述がないので割愛した。

佐藤軍二日記に記された関東大震災についての記述は、以下のようなものである。

まず、九月一日には正午に大地震があったと記している。三日には東京の兄、横浜の叔父が心配であると記している。九日は、午後、停車場にいき、そこにあふれている避難民の様子を記している。十一日は、夜に「東京震災救護」を目的として開催された新聞記者などの実見談を大漁座に聞きにいったときの様子を書いている。十二日は、東京の父が無事である夢を見たことについて書いている。十三日は、大漁座に活動写真を見に行き、東京震災の実景をみたことを記している。十三日以後は8と9を除き、大震災のことは書かれていない。9は、市販の日記の最後の補遺の項に記されているものをそのまま翻刻した。

二 高田日報・高田新聞の記事と佐藤軍二日記

高田日報・高田新聞⁽²⁾には、九月一日以降の関東大震災にかかわる膨大な記事がある。以下、佐藤軍二日記に見られる大震災の記述に対応する記事を掲げる。凡例は、前章と同様である。

10 高田日報 大正十二年九月三日

信越線は

大宮まで

自動車で入京

信越線列車は高崎・大宮の不通も一日午後七時四十七分開通し、大宮まで行くやうになつた。線路は波のやうになつてゐる。今の所では汽車で漸く大宮まで行き、自動車で入京し得る程度である。

11 高田日報 大正十二年九月四日

宛然、戦場の

昨夜の高田駅頭

帰る避難民の出迎へで

三日夕暮の高田駅頭の雑踏は、実に言語に絶したりといふべく、避難者来るの流言巷間に得はるや。心□みせる市民は午後六時の頃より続々と参集して、午後八時の上り列車の来る頃には、折からの雨にもめげず、上京の人々と

共にさし□□広場も、歩行する余地なき程に至つたが、構内の雑踏は又それ以上の有様で、同列車は各駅に於て満員なりしたため駅員総出、警官隊の応援を得て激昂せる地方民の出場を止め、辛くも赤倉出口方面の警戒に赴く歩兵の一箇中隊と十数名の警官隊とを乗車せしめたが、軍刀のひらめき、白布を以て包める銃器、さながら戦場の如き有様を呈した。午後九時下り列車五□分遅延の報に、群集は次第に散じたが、駅貴賓室には師団高級参謀と富永隊長とが何か深く語りつゝあり、不安は刻一刻と色を増しつゝ、事件は何処まで拡がって行くかを知らない。

12 高田日報 大正十二年九月九日

高田駅に降りた

避難者千二百

四日から五日間に

既に大震災後一週間も過ぎて、帝都も大分秩序も恢復して来たとの報が避難者の口々から洩されるが、一方列車の運転状態も稍々円滑となり、こゝ数日で平常に復するであらうと予測されてゐる。最も甚だしかつたのは五・六・七日で、昨八日からは急激に避難者が減り、乗務員もこれならばと安堵してゐる。今高田駅に下車して避難者数を調査すると合計一千二百七十四名で

四日迄一〇三名 五日一六三名

六日五〇〇名 七日四一五名

八日正午迄九三名

更表の如く日々減じてゐる。これと同時に一時は万以上と註された駅前群集も、昨八日は約六・七百名位しかあ

ない。そしてこれからの帰還者は概ね所謂紳士階級の人達であるが、これは暴力を以て他の者達にさへぎられて残つたもので、その一面多少物質的に余裕のあつた人達である事も疑はれない。

13 高田日報 大正十二年九月十日

京浜大震災の

救援宣伝大会

記者団が発企となり

十一日大漁座で報告会

京浜の大震災に対して一層一般国民の同情救援の実を徹底せしむる目的を以て、在高各新聞記者団は「震災救援宣伝会」なるものを組織し、極力悲惨なる惨害の実況を報道すると同時に、物品金品の募集を有効ならしむる事とし、その宣伝を新聞記事を以てなすと同時に、各所に報告演説会を開き、一般の同情に懇ふる筈である。その第一回演説会を明十一日午後六時から市内大漁座に於て開催し、各新聞特派員郡市青年有志等の宣伝演説がある筈。因に大漁座では貸座料二十円の内一十円を同情義金として寄付し、中央電気会社では常夜の電燈を寄付した。

14 高田日報 大正十二年九月十日

七千五百余人

直江津を通つた避難民

直江津駅では震災勃発以来各青年団が協力して、同地に下車せざる罹災民のために握り飯、重湯、ビスケット、仁

丹等を与へてゐるが、同駅は新潟方面と富山方面とを兼てゐるので、以外に避難者が多く、駅員其他青年団・消防組・在郷軍人分会員等は必死になつて救助に勉めてゐるが、既に八日までには七千五百七十人の驚くべき数に達して居る。殊に中央線の不通から、京阪地方への避難者も悉く大迂廻して行つた為めであらうと。

五日 一七〇〇人

六日 二二〇〇人

七日 一八〇〇人

八日 一八七〇人

15 高田日報 大正十二年九月十一日

本日午後六時大漁座にて

災害救援宣伝演説会

傍聴無料 主催 災害救護宣伝会

16 高田新聞 大正十二年九月十一日

十一日午後六時

大漁座に於て

災害救援宣伝演説会

(傍聴無料)

主催 災害救援宣伝会

17 高田新聞 大正十二年九月十一日(夕刊)

明日の救済演説会は

一般の飛入勝手

各方面の名士も出演す

非常の盛況を呈せむ

明十一日午後六時より大漁座に於て開く高田記者団主催の災害救護宣伝の大演説会には、主催者側の外、震災当時東京に在りたるもの、及最近惨状と之れが救済施設を視察して帰還したる者の実見談あり、尚賛助員として河島市長、片山郡長等も出演すべく、その他在郷軍人団、青年団、救済団一般聴衆よりの飛入り演説も歓迎すれば、救済宣伝の趣旨を貫徹する為めには最も適切なる施設なるべく、随つて会場は非常の活況を呈するならん。

18 高田新聞 大正十二年九月十二日(夕刊)

災害救護大演説

愈々本日午後六時より

大漁座に於て開催

本日午後六時より市内大漁座に於て開催する災害救護宣伝大演説会には、各方面の災害□実見者より続々出演申込あり、尚傍聴者側としては高田師範生二百名の一団を初めとして頗る多数に上る模様にて、或は定刻前に木戸締切

の盛況を呈するに至らん状態なり。又当日会場に於て義捐金（金額の多少を問はず）の申込を受付、一纏めとして市役所の該係に交付する筈なり。

19 高田新聞 大正十二年九月十三日

災害救護演説会

聴衆九百、満場感動す

高田記者団主催の災害救護宣伝演説会は、十一日午後七時より大漁座に於て開会、聴衆九百余、殆んど満員の盛況を呈した。先づ水澤北麒麟新報記者の開会の挨拶あり。次で罹災者の一人たる中央大学生山崎多喜雄君（糸魚川町の人）は地図に就いて東京の災害実況を詳明し、図書館司書安藤□順氏、河島市長も東京の実見談をなし、此時過般中頸城郡より久邇宮御本邸への献上品を携へて上京し、その使命を果して帰高したる中頸城郡通信団は、旅装の儘演壇に現はれ、同団を代表して新□村の猪田要氏は同御本邸へ伺候したる顛末を報告し、更に坂井越後新聞記者、神田日報記者、市出身にして東京神田駿河台に二十余年居住し今回の罹災者の一人たる松永安太郎氏の遭難談、本社神岡記者、片山郡長等の演説あり。何れも災害地惨状の実況、及救済の急切なる所以を力説して、満場を傾聴且感動せしめ、午後十一時盛況裡に散会したり。

佐藤軍二日記4には停車場に避難民があふれていると記されているが、その記述に対応する新聞記事は、11・12の高田日報の記事である。11・12とも高田駅に降りた避難民の記事である。4の「停車場」は、高田駅から高田師範（現在の上越市西城町一丁目）⁴までは一キロメートルも離れていないので、高田駅と考えてよからう。佐藤軍二は日記の九月九日に

高田駅に避難民があふれていることを書いているが、高田日報にはすでに三日夕方には避難民を高田駅で待ち受ける市民であふれていると記されている(11)。高田駅に下車した避難者の数は、六日が五〇〇人、七日が四一五人であった(12)。地震が起こったその日の午後七時四十七分には、不通になっていた信越線高崎―大宮間は開通している。そのため、新潟・北陸各県の被災者は信越線を使って逃れてきたのである(10・14)。高田日報は、中央線が不通なので、京阪方面への避難者も信越線を使っているのではないかと記している(14)。

佐藤軍二日記の記述と新聞記事とが対応する内容としては、ほかに大漁座で開催された災害救援宣伝演説会がある。災害救援宣伝会に関する新聞記事は、13・15・16・17・18・19である。災害救援宣伝演説会は十一日午後六時より開催された。高田新聞は、高田師範生二〇〇人が参加する予定であると記している(18)。また、佐藤軍二日記には、災害救援宣伝会では「安藤司書」の実視談があったと記されているが(8)、その「安藤司書」とは、高田新聞によって安藤憲順であることがわかる(19)。

おわりに

本稿では、中越地震被災地小千谷市山谷の佐藤英一氏から新潟大学人文学部地域文化連携センターに寄託をうけた佐藤軍二日記に記された関東大震災の記述を紹介した。その日記の記述に関連する高田日報・高田新聞の記事もあわせて紹介した。高田日報・高田新聞を紹介したのは、二つの史料とも公共機関に保存・公開されていて、だれでも利用できる史料であるにもかかわらず、関東大震災の記事がほとんど活用されていなかったからである。

『新潟県史』にも『上越市史』にも関東大震災の記述はほとんどない。⁽⁶⁾本稿で述べたように、地震がおきた九月一日夕

方には信越線が復旧して動いていた。大宮からであれば地震当日から信越線を使って避難することができた。鈴木淳氏は、著書『関東大震災⁽⁷⁾』で、消防・医療・ボランティアという側面から関東大震災の状況を把握し、そのなかで、高崎駅での救護についても検討を加えている。

関東大震災は東京だけの問題ではない。東京から逃れてくる避難者、そして救援に向うボランティアにとって交通手段は重要であった。高崎駅は信越線の重要な駅であるが、高田駅や直江津駅も重要な駅である。

地震直後、東海道線は地震による被害で使えなかった。上越線が全線開通するのは昭和六年（一九三一）のことであるから、この時期の東京と新潟・北陸各県との交通手段は信越線しかなかった。信越線の重要な停車場のひとつである高田駅・直江津駅から考える関東大震災の研究は重要である。

高田市（現在の上越市）の中央・下小・田端の三青年会は、九月四日午前、東京から来る大震災罹災者のために炊出・交通整理を行うことを決定している。また、直江津区長会は東京市の火災救済方法を決定している。⁽⁸⁾ 関東大震災のとき、新潟県の人々は何をおこなったのか。被災地から逃れてきた避難者の状況や避難者を救護するボランティアの動向などの研究も重要である。災害史研究の枠を広げる必要がある。

注

- (1) 「高田日報」大正十年三月四日、「高田新聞」三月五日。合格者は六〇名（長野県から一名。他はすべて新潟県出身者）、北魚沼郡からの合格者は、佐藤軍二と桑原大三の二名。
- (2) 本稿では、新潟県立図書館所蔵のものを使用した。
- (3) 本稿では、上越市立高田図書館所蔵のものを使用した。
- (4) 『公孫樹下の八十年』一九八二年

(5) 大漁座は、現在の高田中劇会館(上越市仲町三丁目)。大漁座については、『上越市史 通史編5 近代』(上越市、二〇〇四年)を参照されたい。

(6) 『高田市史 第二卷』(一九五八年、高田市)では、「関東大震災と高田」という項を掲げ、救助活動等について記述している。

(7) 鈴木淳『関東大震災』筑摩書房、二〇〇四年

(8) 『高田日報』九月五日

〔付記〕 翻刻に際しては、原直史氏・溝口敏磨氏・福原圭一氏に協力いただいた。